

木田市長の

どろんどろんと
コミュニケーション



ぼちぼちと末永く

Vol.105

鳥羽マルシェがオープンしました。私にとってはやっとここまで来たという印象です。

佐田浜における水産物の直売所のアイデアは、今から4年前の2010年10月1日号の広報とばです。述べています。なぜ今になってしまったのか。その最大の理由は、私にノウハウも自信もなかったということだと思います。市役所の中に「鳥羽(佐田浜)港検討プロジェクト」を作り、彼らがさまざまなアイデアをかき集めてくることよって、完成までの道すじが見えてきたように思います。

その中で大きなポイントが二つありました。一つは農協と漁協が一緒になって取り組

んでいただけることになったことです。日本中どこへ行っても農協や漁協は数多く存在します。しかし農協と漁協が共に手を取り合って事業をすすめるということは、全国的にも珍しい取り組みです。二つ目は三重大学の先生方が積極的に関わってくれたということ。これまでの会議の中で、ややもすると将来の不安が先に立って、暗いムードが支配してしまうこともあったようです。しかし、三重大学の西村副学長は、鳥羽の佐田浜のもつ景観のポテンシャルの高さを力説し、鳥羽、志摩の農水産物の素晴らしさや可能性を教えてくださいました。

鳥羽マルシェを訪れた市民から「佐田浜ってこんなにき

れいな所やったんや」という感動の言葉も寄せられています。まさに鳥羽市民喜び、市外の人々来たるという兆しでしょう。マスコミに取り上げられることも多く、駐車場に止まっているナンバーは結構県外車が目立ちます。この情報発信によって鳥羽市の観光全体に好影響が出て欲しいと思います。

マルシェは予定より三か月遅れてオープンしました。そのせいでおなかの中で大きく育ってしまった訳ではないでしょうが、ふり返るとマルシェのオープンは難産であったと思います。オープンの日も台風19号の襲来でひやひやさせられました。

しかし、スタートした以上は成功させなければなりません。鳥羽マルシェは一般の店と違い、ひとり繁栄しても成功とは言えません。農業や漁業が少しでも元気になり、鳥羽市民が鳥羽の景色や産物を楽しみ、加えて観光客の数が増えて初めて成功となります。商売は「牛のよだれ」と昔から言われます。ぼちぼちと末永くつづき、市民から愛される鳥羽マルシェであって欲しいと思います。

イコール パートナーシップ

Vol.116



富岡製糸場

市民課人権・生活係
☎ 25 1141

6月25日に群馬県の富岡製糸場が世界遺産に登録されました。この富岡製糸場は、明治5年に明治政府が日本の近代化のために最初に設置した官営(国営)の模範工場であり、建物の設計や機械、労働環境においてもすべてフランス人指導者が携わりました。女性工員(以後「工女」)が主な労働力として活躍する製糸場の労働環境については、映画「あゝ野麦峠」にもあるように、戦前はつらく暗いイメージでしたが、当時の富岡製糸場の労働時間は7時間45分が基本であり、日曜、祝祭日や年末年始・夏季の各10日間など、年間75日も休日があったとされています。また、能力別の月給制度や、就業規則、産業医制度も整っており、寮費(寮制)や食費は製糸工場が負担するなど、明治期の女性の労働環境として

は、かなりの厚遇であったようです。しかし開業当初は、「異人に生き血を搾り取られる」といったうわさが流れ、なかなか人が集まりませんでした。そこで明治政府は、旧土族などの娘を集め「伝習を終えた工女は、出身地に戻り器械製糸の指導者とする」などの論告書を各府県に発布しました。これにより、製糸技術を学んだ工女は帰郷後、各地で技術を伝えることにも貢献しました。

当時の貴重な史料である工女、和田英による回想録「富岡日記」には、製糸場での作業内容や、日々の食事、フランス人技術者夫人のファッションや親睦会の様子などについて書かれており、富岡製糸場での労働生活は、多忙ながらも働きがいを見出すことのできる充実した日々であったことがうかがえます。